

代替バスの大合唱

毎日新聞 2013年11月22日 大阪夕刊

「現場の情景を細かく思い浮かべられなければ原稿は書けない。だから記者は現場を見た人たちの話を集めるんだ」。インターンシップの中学生に、そう話した後、今も心に引っ掛かる取材を思い出した。阪神大震災から半年。鉄道代替バスで起きた、ちょっといい話だ。

それは、阪急神戸線の全線復旧を控え、夙川駅と西宮北口駅を結ぶ代替バスが最終運行を迎えた1995年6月の夜のこと。運転手が「代替バスは今日が最後。ありがとうございました」と言うと、女子高生らしきグループが「蛍の光」を歌い出し、50人ほどの乗客が声を合わせ、バスは大合唱に包まれたという。

バス会社の話をもとに翌日夕刊に概要を書いたが、乗客の話は書き込めなかった。それから11年。歌った理由を聞きたくて再取材したが、乗客は見つからなかった。特集記事にまとめ、乗客が名乗り出ることを期待したがだめだった。

見知らぬ人同士、なぜ一つになって歌えたのか。震災のつらい経験やバスへの感謝、生きる喜び。さまざまな思いを歌に託したのだろう。乗客を見つけて話を聞きたい。今もそう思う。 【砂間裕之】